

誰のための「保育者論」なのか — “ひよっこ”の授業担当者が考えていることは“半分、青い” —

龍 崎 忠

岐阜聖徳学園大学教育学部

Pre-school classes are for whom? What novice head teachers think in every class

Tadashi RYUZAKI

キーワード：保育者 専門性 子ども理解 うれしい保育

I. はじめに

1. この小論の動機

一般に言えば、おそらく学校の多くの教員は、授業を代表とするさまざまな教育活動を通して「子どもを育てる」ことに喜びをおぼえる者であるだろう。このことは逆に照らせば、その「育てる喜び」が、自分自身を、教師としてもあるいは人間としても育てているのである。「育つ喜び」もそうしたさまざまな教育活動に存在するのである。大学教員も同じく、自身の研究テーマを学生たちと共有し学び合うことで知見を深めていくことに、程度の差はあれ多少の喜びを見出す者であると思う。学校教育法の第八十三条には、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」とある。「〇〇ができるようになる」ことが狭義での教育の至上の目的となりつつあるなかで、自身の人間としての生き方やあり方をめぐって思い悩むというある種の道徳的葛藤が、そしてそうした葛藤の解決としての「育てる/育つ喜び」が、日々の研究や教育に埋め込まれているはずである。

このようなことを考えながら大学教員として15年を過ぎた頃に依頼を受けたのが、本学保育専修の1年生を対象とした講義の「保育者論」である¹⁾。筆者はとくに本学に着任してより深く教員養成に携わるようになったこと、そして自身の子育ての経験が大きく影響したこともあり、保育学や幼児教育学に関心をもち、少しずつ研究を進めている。他の教育学研究と同様に、著作や論文から得られる知見だけでなく、現実に園での保育の場に関わることで得られる発見もかなり多い。そうした新たな知見や発見は、保育の哲学として新たに筆者を彩ってくれる貴重なものばかりである。保育学の講義を通して今度は学生しかも1年生たちに「知的、道徳的及び応用的能力を展開させる」ことに貢献できるとは、きっと二度とは得がたいことでもあろうと思われた。

本稿は筆者がはじめて保育学について授業を担当した初年度の拙いながらも記念碑的な報告である。講義同様に今しか書き残す機会が得られないわけで、毎回の授業で小さく織りなされたできごとをいくつか示すことで、授業担当者としての「育てる/育つ喜び」の経験を記して残しておきたい。

副題については一言説明を要するだろう²⁾。講義のシラバスを前年度末に新しく作成し、2017年度の春学期を迎えた頃にスタートしたのが「ひよっこ」という朝のドラマであった。保育者論は後期の授業であるので、悠長に構えつつこのドラマに励まされながら、実り豊かなものとなるよう地道に準備したことが思い出される。最終回の前日が講義の初回でもあった。そして後期の授業が終わり資料を整理しながら、そしてこの報告論文の執筆に取りかかりながら迎えた2018年度の春、「半分、青い」という名前の朝のドラマがスタートした。どちらも主人公の成長を感受できる秀逸なドラマとして位置づけると、ちょうどこの頃に自身が学生たちの成長を、そして授業担当者としての成長を実感できることばかりで、自画自賛に過ぎないかもしれないが³⁾、ドラマのように過ぎていった保育者論であったと振り返ることもできる。個人的なイメージとしては、菜園で栽培したものが開花し実を結び一緒に収穫するまでの物

語であろうか。

2. 講義「保育者論」の概要

厚生労働省の「指定保育士養成施設指定基準」の通知文（平成25年8月8日）を鑑みて、「保育の本質・目的に関する科目」に位置づけられることから、講義の概略を、①保育者の仕事を具体的に学ぶなかでその役割・倫理・制度的な位置づけについて学ぶ、②保育の専門職性を子どもとの具体的な関わりにおいて理解する、③保育者としての自己イメージを深く温かく育む、とした。また講義で扱う内容についても同様に考慮し、15回の計画を立てた。教科書には汐見稔幸・大豆生田啓友の両氏の編著による『保育者論（第2版）』（ミネルヴァ書房、2016年）を指定し、同書を土台にしながらも、かなりの部分で別の資料や題材を活用して展開した。また同書を事前・事後の学習として丁寧に読むことを求めたので、予備的な知識や理解を前提できたおかげで、毎回の講義もかなりスムーズに展開したと感じる。別途で、講義用の資料とワークシートを毎回準備して配布し、回収したワークシートにはコメントを付して次回に返却した。ワークシートには、毎回自己評価について記載する部分を設け、とくに自己イメージとの関わりが強かったコメントや意見を次回の冒頭で紹介した。このようにしてフィードバックが毎回なされたことも付け加えておきたい。

個人的には先に述べた概略のうち、とくに③に挙げた保育者としての自己イメージを育むことを大事にしていたように思う。このことは授業のテーマを「子どもと成長する保育者」像の形成と保育者としての自己理解」と設定したように、自身が保育の当事者となって事象をどのように考えるのか、という見方を養いたいと願ったからである。

15回の概略を以下に示す。

1. 保育者になるということ(1)：保育者の役割とは(教科書第1章前半)
2. 保育者になるということ(2)：保育者の制度上の位置づけ(教科書第1章後半)
3. 保育者の一日(1)：保育者の専門性をめぐって(教科書第2章前半)
4. 保育者の一日(2)：保育者の専門性をめぐって(教科書第2章後半)
5. 子どもの思いや育ちに寄り添う：保育者の専門性をめぐって(教科書第3章)
6. 子どもと一緒に心と体を動かす(1)：省察する保育者(教科書第4章前半)
7. 子どもと一緒に心と体を動かす(2)：評価とカリキュラム・マネジメント(教科書第4章後半)
8. 子どもを文化・自然とつなぐ：改めて保育者の専門性とは(教科書第5章)
9. 保護者や家庭とつながる：保護者との協働(教科書第6章前半)
10. 地域社会・専門機関とつながる：地域との協働(教科書第6章後半)
11. 学び合う保育者(1)：同僚との協働(教科書第7章前半)
12. 学び合う保育者(2)：生涯発達の視点(第7章後半)
13. 保育の専門性を問い直す(1)：キャリア形成(教科書第8章前半)
14. 保育の専門性を問い直す(2)：保育者としての自己イメージ(教科書第8章後半)
15. 全体のまとめにかえて：子ども/保育者のための哲学

以下、これらのうちから特に筆者にとって印象に残ることとなった3つの授業を紹介して振り返ってみたい。

II. 「保育者論」の現場から

1. 授業の「ガイダンス」でいきなり考えさせられた保育者の役割（第1回授業）

いよいよ、待ちに待った初回である。講義全体の計画や評価を説明するだけでは惜しいと思い、子どもを捉えるまなざしが1年生たちにどのように内面化されているのかを知ろうとして、泣いているある子どもの様子の写真から、どんなことを考えるか、という図1-1のようなワークを試みた⁴⁾。それぞれで考えた後に、近くの者との交流も交えた。

名前 _____

0. ガイダンス

【ワーク】

これからある子どもの姿を映写します。これを見て、①まずは率直な感想を書きましょう。また、この子どもにどんな関わりを試みたいですか。②あなた自身はどんなことを大切にしている保育者になりたいか、書いてみましょう。 (写真の出典：倉橋惣三・言葉/小西貴史・写真『小さな太陽』フレーベル館、2017年)

<以下記述欄>

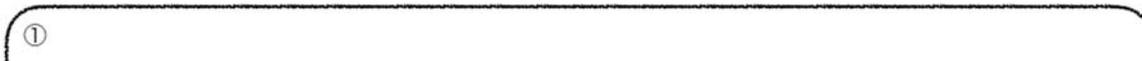


図1-1 初回のワークの一部

泣いている子どもへの共感が大半にとどまるだろうが、さもなければ学生たちはどのように受けとめるのだろうか、と興味津々に考えていた筆者にとっては、別の意味で早々の「洗礼」を浴びることとなったのである。

「どうしたの?」「何かあったの?」と子どもに聞いてみたい率直な感想に混じって、図1-2のように、子どもの涙が「きれいだ」とか、「私まで悲しくなる」といった感想にあふれたからである。

<以下記述欄>

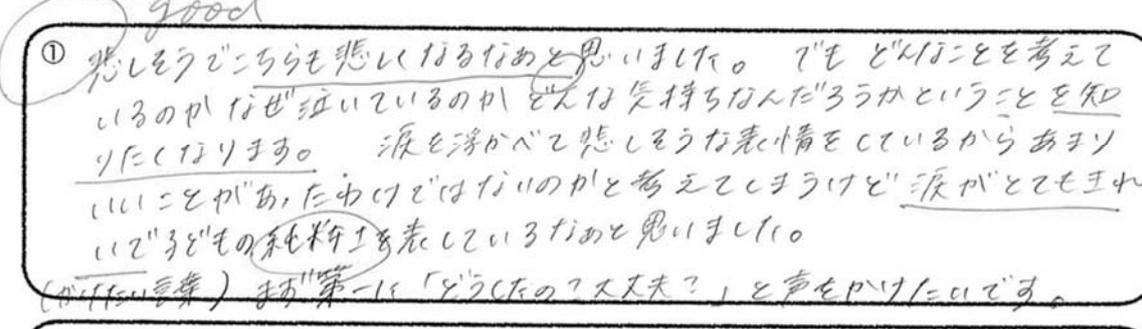


図1-2 ある学生Aの記述

学生Aは、涙する子どもの姿の意味を共感的に受けとめつつも、むしろその美しさや純粋さに求めている。他にも、「何か私にできることがあればしたい」「抱きしめたい」といった感想や、子どもの視線が上向きであることを捉えて「何かの気持ちをじっとこらえているに違いない」、あるいは鼻の色に注目して感情があふれる寸前だ、というものもあった。すでに、通り一遍ではない、多様な捉え方をもとに交流できていることを実に頼もしく思ったことと、初回から逆に保育専修の学生たちに教えられることばかりで、この先の授業がより楽しみになったことを思い起こす。

<以下記述欄>

① 純粋な涙だと思いた。悲しいという気持ちで泣いているように見えませんでした。何か複雑な感情で泣いているように見えました。だから、この子に何が起きて泣く状況ができてしまったかを知るためにも「何があったの?」+「どうした?」と声をかけて子どもの気持ちを把握してから考えたほうがいい。

② いつでも子どもの気持ちを考え、子どもに寄り添えるような保育者になりたいです。ずっと子どもの様子を見つけて状況を把握するとは難しいと思うので、何か起った時には、子どもたちの声を聞き、子どもたちの立場にたって考え、子どもたちの気持ちをより理解できるようにしたいです。

図1-3 ある学生Bの記述

図1-3の学生Bは、授業で直接に発言をしてくれたことが今も印象深い。と言うのも、①の記述の発表に加えて、「だから、(すぐに声をかけたり何かするんじゃなくて)、いったん待つことも大切だと思います」という主旨のものを述べたからである。筆者にとっては、先の学生AやこのBのような認識や心構えこそが、保育の世界の豊かさであることを実感した瞬間であった。

この初回には、倉橋惣三の不朽の名著である『育ての心』の一説を紹介して、うれしい先生、うれしい保育がますます大切になるんだ、うれしいという形容詞があつての保育や教育であるべきなんだ、といったことも話した。図1-4のCによる振り返りのように、保育者の役割とは「待つことだ」という捉えの広がりも見られた。学生にも筆者にも充実した初回であったと言える。

(*以下には感想や意見など振り返って記してください)

泣いている子どもの写真を見たとき 私はすぐに声をかけると思ったけど、待ってみるといつ意見もあつて泣いているからといってすぐに声をかけなくても良いときもあるんだと知ることができて良かったです。
発見が、よかったぞ。

図1-4 ある学生Cの記述

2. 子どもの思いや育ちに寄り添うとは：保育者の専門性をめぐって（第5回授業）

第4回の授業では、教科書の第2章に出てくる、3年目の保育士Mさんの保育園での一日のなかで繰り広げられるさまざまなできごとについて、保育者の専門性が発揮されていると考えられる部分を検討した。それらのフィードバックを踏まえて、「子どもの思いや育ちを理解する仕事」として保育者の専門性を意味づけるのが第5回である。教科書の第3章には4つのエピソードが含まれていて、これはこれで十分に読み応えのあるものであったけれども、保育学の研究方法の一つであるエピソード記述とは何かについても提示したかったことと、実際のあるエピソード記述と分析を学生たちと読み合ってみたかったこともあって、教科書とは別のエピソードを準備した⁵⁾。用いた資料は、池田瑞奈保育士による「おかわりください!」(2013年7月13日)というもので⁶⁾、未満児であるゆきちゃん(1歳11ヶ月)とまゆちゃん(1歳8ヶ月)とが一緒に給食を食べている場面である。お魚のおかずのおかわりを保育士

からもらってもなかなか食べようとせず、「まゆちゃんは？」と小さな声で保育士に訴えるも理解してもらえず、意を決して「まゆちゃんも……」「魚おかわりください！」と力強く伝えてくれた、というエピソードである。池田保育士は、「私はその言葉にびっくりしたと同時にとてもうれしくなった……ともに、ゆきちゃんのこの優しさにどうしてすぐに気づけなかったのだろう……身近にいた私が1番に気付いてあげないといけなかったのに……と申し訳ない気持ちでいっぱいになった。」と振り返っている。

5. 子どもの思いや育ちに寄り添う

別で配布する資料は、ある保育士によるエピソード記述です。これを通読して、①ひとまずは感想や気がついたことや考えたことを記してみましょう。②その後、先週と同じ5人ないし6人グループになって、交流してみましょう。③グループ交流のなかで、この保育エピソードをもとに「子ども理解とは何だろうか」ということも議論できることを期待します。



図2-1 第5回授業のワークシートの一部

第5回の授業では、図2-1のように、グループ交流を意識しつつ、子ども理解としての保育者の専門性とは何かを考察できるように配慮した。

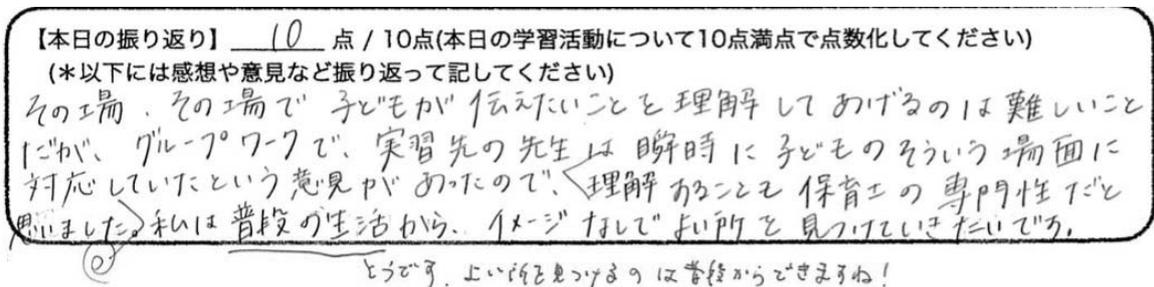


図2-2 ある学生Dの記述

図2-2は、ワークを踏まえて、専門性としての子ども理解に着目した学生の記述である。教科書では一般的に子ども理解について「子どもを偏見なく受けとめる、まるごと受けとめる」ことの大切さが説かれる傾向にあって、Dのように、むしろ保育者たちが子どもを理解する際の即時性やその瞬間を見逃さずにいるのだ、と学んでいることも注目に値する。第5回授業を通して、子どもを理解することそのものの難しさにも直面しつつ、その奥深さを池田保育士のエピソードから学んだ学生が実に多かった。

【本日の振り返り】 8 点 / 10点(本日の学習活動について10点満点で点数化してください)
 (*以下には感想や意見など振り返って記してください)

小中高の学校生活の中でも、「この子は○○だから」と勝手に思い込んで決めつけていることがありました。
 先入観から悪いイメージをもつ。人との関係にも影響が及ぼさうと思います。でも、良い面ばかり
 を見るのではなく、良い面悪い面、人にはどちらもあるから、両方の面を受け取る。関わることを大切と改めて
 思うことができて

これも大切にしてほしいものですね！

図 2-3 ある学生Eの記述

そうした子ども理解の難しさを、先入観との関わりで述べたのが図2-3の学生Eである。子どもの姿を良い面と悪い面の両面から捉えることの大切さ、そして勝手な思い込みの意識のされなさを改めて思い起こし、自身の普段の生活でも課題としていることが伺える。これもまた保育者の専門性として積極的に子ども理解の意味を受けとめていることがよく伝わってくる記述である。

続く第6回の授業では、こうした専門性を「省察する保育士」として意味づけ、図2-4のように、「いろいろな視点からその子の姿を見る」ことのおもしろさを中心に据えて展開した。紙幅の都合で十分には学生たちと考えた内容を示すのはあきらめざるを得ないが、図2-5の学生Fのように独特の視点からその専門性を捉えようとする者も現れはじめた。授業も中盤に差し掛かり、34名の多面的・多角的な子どもの理解へと臨む姿に立ち会えたことを本当にうれしく思う⁷⁾。

○「省察する」ということのなかには、どうやら「いろいろな視点からその子の姿を見る」ことが含まれそうですね。僕の好きな表現に子どもを「広い視野から多面的・多角的に」受け止める、という言い回しがあります。さて、みなさんはこの「広い視野から多面的・多角的に」とは何だと考えますか。

【広い視野から多面的・多角的に】

図 2-4 第6回授業のワークシートの一部

【広い視野から多面的・多角的に】

私は五感を使って見ることだと思います。Fにまとめます。

視覚…表情、顔色 → 体調、感情
 味覚…給食 → 好き嫌いを無くせるように声かけ
 嗅覚…におい → 家庭環境、体調管理
 聴覚…泣き声、笑い声 → その場の状況を把握する

⇒ 月ごとと心で理解する。

「おいしい!!」と先生が言うとき

図 2-5 ある学生Fの記述

3. 物語の世界を楽しむ：おてて絵本（第8回授業）

「保育者の専門性とは何か」とは、確かに保育者論の授業であるからには、一貫して持続的な考察が求められる中心的な問いであった。しかし、子どもを文化や自然といった環境と具体的な活動を通してつなぐのが保育者の専門性でもある。もともとは外に出かけていって「秋を探す」というテーマの活動を何かしらで検討していたものの、12月となり急な寒さには勝てず、という授業者の判断で、むしろ絵本をお互いに読み聞かせてみよう、という企てと、いつかやってみたかった「おてて絵本⁸⁾」という活動の2つを本時に据えた。自然環境に親しむことは叶わなかったものの、絵本を通して創造的な想像の世界に誘うことができたように思う。図3-1に、活動の一部を示す。実際に動画を撮ってもらい、それを視聴し合った。

【ワーク2】

○3人一組になって、おてて絵本にチャレンジです。それぞれの役割は、1) (子どもになったつもりで)おてて絵本をつくる人 2) お話を聞かせてもらう人(もちろん合いの手を入れたりしましょう) 3) 記録をする人(メモでもいいし、どうせなら動画を撮ってシェアしましょう!)、です。
交替しながら、みんなそれぞれやってみます。

[メモ欄]

図3-1 第8回授業のワークシートの一部

Ⅲ. おわりに

以上、前後の関係は多少触れられたものの、合わせて3回の授業の報告しか叶わなかったが、保育者の専門性とは何かをめぐって、学生たちと一緒に考えてきたことの一端は示すことができたように思う。

また、これから述べることは保育者論の中で扱った「おかわりください!」を含む、講義資料や授業の中で出題された課題全般に共通して言えることだが、私は課題に対して「難しい」「わからない」「自分が保育の現場に立ったらどうするのだろう」と考えることが多かった。このようにして課題を自分自身のことに置き換えて考えたこと自体も私にとって大きな成長であったと思う。また、自分の考え方だけでなく、周りの仲間の自分とは違う意見に刺激を受けることもでき、様々な視点、広い視野で物事を捉えたりすることで保育に正解はなく、それぞれが違ってこそいいということを学べたことも私にとっての成長だと感じた。

図4 期末レポートに寄せられた自己理解の姿

図4は、期末レポートで課した「受講の前後で、保育者をめざす自分がどのように成長したと考えるか」という考察の一部である。ここに見事に示されるように、「自分ごと」として保育に向き合い、自分にはどんな保育がいずれ実現できるのだろうか、というきわめて道徳的な問いと新たに出会っていることがよく分かる。保育とは哲学の実践だ、と言ってよいとも思う。

最後に、本稿の論題に戻ろう。果たして、誰のための「保育者論」の授業であっただろうか。新米の授業者として、学生たちのために相応の努力はしてきたと思う。学生たちもたくさん学んでくれたことは、講義の感想や、期末レポートでの記述内容、そして2年生になって実習先などで見せてくれる姿からもよく分かるし、華やかに成長している姿であるとさえ感じる。しかし敢えてそうした成果は、すべてひとえに筆者自身のためであったと述べたい。菜園のイメージだとはじめに触れたように、蒔いた種は2年目を迎えた2018年度の保育者論においても確実に芽吹き、開花し始めている。奥深い保育の世界でのうれしい探究は、ようやくスタートしたばかりである。

注・文献

- 1) 当時の保育専修長であった佐木みどり本学元教授には感謝の念以外にはない。
- 2) 本学の小林直樹教授が2年生対象のプログラムである教育実践観察で披露なさる「優秀な教員は、授業のデザインができる教員である。教師は、優秀な脚本家+演出家+俳優でありたい。」との至言に触発されるものである。保育者論を担当したことは、筆者が敬愛するジョン・デューイの著作『人間性と行為』の第3部第3節「熟慮することの本性」で論じられるように、人は「ドラマによるリハーサル」を通じて、知的で道徳的な想像力を育てているのだ、というものの証左の経験でもあった。
- 3) 常々惜しいと感じたのは、全学での学生による授業評価の機会が得られなかったことである。数値的に検討する材料は得られなかったとは言え、毎回の授業の振り返りや全体での振り返りを記述してもらい、それを授業の改善に役立てたことは言うまでもない。本稿の執筆に取りかかっているこの9月でも、保育者論の授業を思い出して「授業大好きでした、また先生の授業を受けたいです！」とメールをくれる2年生がいることも付け加えたい。
- 4) 写真の出典については、倉橋惣三・言葉/小西貴史・写真『小さな太陽』フレーベル館、2017年。
- 5) 「子どもの思いや気持ちを感じた保育者が、それを自身の思いや気持ちとない交ぜにして語った時にはじめて、“わかる”にたどりつけるのではないのでしょうか（汐見稔幸・大豆生田啓友（2016）、『保育者論（第2版）』、ミネルヴァ書房、p.50）」、「エピソードは、保育士自身の体験であり、そこに描かれるのは、保育士から見た子どもの世界であり、子どもとの対話である（鯨岡 峻（2012）『エピソード記述を読む』、東京大学出版会、p.14）」とあるように、エピソードを読むことで保育者としてのセンスがより磨かれると言える。授業の配付資料では、「エピソード記述とは、どのような保育をしているかを振り返るために、保育者がみずからの体験をとにかく記録し、それを自身なりに考察していく、という方法だと言えます。それは、“できる限り客観的に事実を記述する”のではなく、むしろ“保育者自身の思いや考えが前提された保育の実践”を含んだ、ある意味では人間味にあふれた記述になっています。しかもこの記述の記録を、保育者や研究者で読み合う（カンファレンスと呼ばれます）ことで、さらに洞察を深めることも可能になります」と記して、その意義についても述べている。
- 6) 室田一樹（2016）：「保育の場で子どもを理解するということ」、ミネルヴァ書房、69-70。授業では全文を提示した。
- 7) 多面的・多角的な考えを深める学びは、別に道德教育の専売ではないはずだという思いもある。
- 8) 授業では、おてて絵本普及協会のサトシンさんのHP (<http://www.ne.jp/asahi/satoshin/s/ofk.htm>) も紹介しながら、おてて絵本とは何か、そしてどのように進めるかをガイドしながら、実際に取り組んでもらった。